2021年10月3日・佐土原キリスト教会・礼拝説教
聖書箇所：マルコ福音書1章21～28節
説教：この人から出て行け

前にもお話したことがあると思いますが、カナダにいる時、「現代のユダヤ教では『過越しの祭り』をどのように祝うのか」、興味を持ってバンクーバーにあるユダヤ教の会堂を訪ねたことがあります。イエス様の時代には、「過越し」を祝うために、人々は神殿に羊を連れて行って、祭司に屠ってもらい、ある部分を犠牲として献げ、残りの部分を家に持ち帰って焼いて、1頭の羊を家族10人くらいで食べました。私は「会堂の中で、何かそれに似たことが為されているのではないか」とチラッとそんなことも思いました。中に入ったら、1 人の男性が私を見つけて、キッパーという小さな被り物を渡して礼拝堂に案内してくれました。礼拝堂ではラビを中心に皆で聖書を読んでおられました。食堂らしい部屋を覗いたら、「羊を屠る」等という雰囲気は全くなく―(当然ですが)―テーブルの上には綺麗に食器がセットされていました。会堂で一緒に「過越しの食事」をするのではないかと予想しました。忘れられないのが、私を案内してくれた男性のこぼれるような笑顔と、礼拝堂を出る時に聞こえた「ラバイ！」とラビを呼ぶ女性の声です。ユダヤ人の人達のコミュニティーでは、今も会堂が大きな役割を果たしているように感じました。今朝の箇所の舞台は、その会堂です。

前回の個所でイエス様は、ペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネという最初の弟子達を招かれました。その弟子達が最初に経験したのが「カペナウムの会堂の出来事」でした。初めにこの個所の内容について確認し、その後、この個所が教える信仰生活への適用を考えたいと思います。

1：内容～権威ある教えと権威による悪霊追い出し

ユダヤの人々は、安息日―(土曜日の朝)―になると、会堂に集まって「信仰の告白」をし、「祈り」をし、朗読される「聖書」に耳を傾け、説教を聞きました。キリスト教会の礼拝の原型は、ユダヤ教の会堂にあります。ただ会堂には、専属の説教者がいませんでした。会堂司と呼ばれる管理人が、その日の説教者を選びました。この時、会堂司はイエス様を指名したのだと思います。それでイエス様は説教をなさいました。21節に「それから、一行はカペナウムに入った。そしてすぐに、イエスは安息日に会堂に入って教えられた。人々は、その教えに驚いた。それはイエスが、律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように教えられたからである」(21～22)とあります。人々はイエス様の教えに驚くのですが、ここでイエス様が何を語られたのか。おそらく「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい」(マルコ1:15)、「神の恵みのご支配が始まったから、あなた方は心を変えなさい。神を無視して生きて来たことを認めて、罪を認めて、神の許に帰りなさい」、そう語られたのかも知れません。あるいは「山上の説教」のような説教を為さったのかも知れません。

しかし「マルコ福音書」は内容を書きません。つまり「語られた内容よりもイエス様の語り方に人々が驚いた」ということを強調しているのです。ではイエス様の語り方の何が「律法学者たち」と違っていたのでしょうか。「リビング・バイブル」は22節をこう訳します。「イエスの話し方が、これまで聞いてきたのとは、まるで違っていたからです。イエスはやたらに他人のことばを引用せず、権威をもって堂々と話されました」(リビング・バイブル1:22)。どういうことかというと、会堂で頻繁に説教していたのは、律法学者です。専門的に「聖書―(特に『モーセ五書』)」を研究していた聖書学者です。しかし彼らは、常に「律法の○○に○○と書いてある、ラビ○○がこう言っている」という様に、何かの権威に拠って語りました。(牧師も「聖書の○○に○○と書いてある」と言って、そこから話を始めるしか出来ません)。しかしイエス様は「山上の説教」でも「昔の人々に、『人を殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません…」(マタイ5:21-22)と語られました。「あなたがたは聞いています」というのは「律法学者が

語っているのを、あなたがたは聞いています」ということです。その人々にイエス様は「しかしわたしはあなたがたに言います」と言われるのです。何の権威にも寄りかかっていない。自らの権威で「わたしは…」と語られたのです。こんな語り方をする人はいなかった。それは、律法学者達にしてみれば、聖書の権威を無視することでした。それだけではなく、それは、そのように語っている律法学者の面目を潰すことでもありました。だからすぐに律法学者や、彼らの多くが所属しているパリサイ派のグループは、イエス様に対する激しい敵対心を持つのです。自らの足下を崩されると人は怒ります。「マルコ 3 章」で、彼らはイエス様を葬ることを考え始めます。

しかし、私達はここから知ることが出来るのです。イエス様こそ、何の権威にも寄りかからないで、自らの権威と責任において、真実の言葉を語ることが出来た方なのです。なぜ出来たのか。真実―(神の真実)―を知っておられたからです。だからこそ私達は、イエス様の言葉の中に「神の御心―(真実)」を読み取ることが出来るし、そうしようとするのです。

さて、そのように真の権威を持って語られたイエス様に対して、敏感に反応したものがいました。悪霊です。ここに「汚れた霊(悪霊)につかれた人がい」(23)たのです。でも彼は、イエス様が語られるまでは、つまり律法学者が語っている間は、皆と良くなじんでいたのです。彼が悪霊に憑かれていることが、皆には分からなかったのです。それだけ人々の心が鈍っていたということかも知れません。しかし真の権威を持つ方―(神の許から来た方、悪霊を滅ぼす力を持つ方)―を見た時、悪霊は、男の口を借りて騒ぎ出すのです。しかしイエス様は、それを「黙れ。この人から出て行け」(25)の一言で追い出してしまわれたのです。人々はこれに驚きます。しかしここのポイントは、イエス様が悪霊を追い出されたということより、むしろイエス様が真の権威を持って語られたということです。悪霊さえ逆らうことの出来ない権威を持っておられ、権威によって語られたのです。

そしてこの記事は、私達にイエス様の権威についてもう一度考えるように教えるのです。「人々はみな驚いて、互いに論じ合っ…た」(27)のです。「この人は一体誰だ」。私達はイエス様のことを「神の子」と認め、イエス様の権威を認めている…つもりです。しかし日常生活のレベルで、本当にイエス様の権威を、イエス様の教えの権威を認めているのか、問われます。

こんな話を読みました。ご主人に先立たれたケニアの A さんは広い土地を相続しました。ところがその土地の大半は小高い山によって占められ、放牧にも耕作にも適しません。A さんは経済的に困り、「この山さえなければ、穀物を植えたり、羊を飼ったりできるのに」と思っていました。A さんはある時、「だれでも、この山に向かって『動いて、海に入れ』と言って、心の中で疑わず、ただ、自分の言ったとおりになると信じるなら、そのとおりになります」(マルコ 11:23)という御言葉を知って心打たれました。「すごい。うちの山に向かって『平らになれ』と言って、疑わないで信じるなら、そうなるのだ」。ある宣教師は言いました。「とんでもない。イエス・キリストは、比喩として『問題の山』について語れたのですよ」。でも A さんは聞きました。「でもこの言葉は本当にイエス様が語られたのですよね」。宣教師は「そうです」と答えました。A さんはその日から毎日「主イエスの御名によって命じる。山よ、平らになれ。イエス様、山を平らにして下さい」。2 か月が過ぎましたが、山はびくともしません。それでも諦めずに、毎日山に命じ、神に祈り続けました。4 か月が過ぎた時のことです。建設省の役人が A さんを訪ねて来ました。「道路建設のために大量のアスファルトの原料が必要です。大学に調査をさせたところ、お宅の山はコールタールの原料の塊だと分かりました。ぜひお宅の山を買い上げたいのです」。「神がついに私の祈りを聞いて下さった」、こう確信した A さんは大喜びで値段を交渉して、ついに 400 万ドルで売却が決まりました。アッと言う間に、山は崩されて平らになりました。

いつも、いつもこうなるわけではなりでしょうが、しかし、イエス様の権威、主の御言葉の権威を信じて、祈って行った女性の信仰に教えられます。私達も、イエス様の権威を信じて、御言葉を握りしめ、祈って行くことが大切ではないでしょうか。イエス様は言われました。「すべて、疲れた人、重

荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」(マタイ11:28)。重荷がある時、「主は必ずこの重荷を取り除いて下さる」と信じて、「私から重荷を取り除いて下さい。ここを通って行く力を与えて下さい、助けて下さい」と求めれば良いのではないでしょうか。イエス様の権威を信じて、あらゆることの中で主におすがりしたいと思うのです。私達の主は、私達を苦しめる悪霊さえ、その権威の前には逃げ出す、そのようなお方なのです。その権威で、私達を守り、導いて下さるお方なのです。

2：適用～イエスの権威に依存する

ある考古学者が中東の墓を掘って頭蓋骨を調べたところ、幾つかの頭蓋骨には、頭の天辺に小さな穴が開けられていたと言います。しかもそれは生前に開けられた穴でした。外科手術が未熟だった当時、それは非常に危険な手術でした。なぜそこまでして穴を開けたのか。それは悪霊が体から抜け出すように開けられた穴だったのです。当時の人々は、それほど悪霊を恐れました。当時のユダヤ人もまた、悪霊を恐れました。この個所も、そのような文化的、時代的な背景の中で起こったことです。

現代を生きる私達は、「悪霊」と聞いてもあまりピンと来ないのが実感ではないかと思います。しかし、では「悪霊は古代の話で、今は関係ないか」というと、決してそうではありません。私の知っている先生は、宣教地での体験を基に悪霊の本を書きました。その先生にとって悪霊体験は現実です。ポール・トゥルニエという有名な精神科医は、「何か懸命な策略のある敵―(悪霊)―に出会っているという感じを、病気と闘っている時に持った医者は、私と同様に多くいる」と言っています。彼は悪霊に憑かれた少女に実際に相対しています。またCSルイスは「悪魔の手紙」という本の中で、悪魔―(悪霊)―が現代社会において、現代人にどのように働きかけて来るのか、見事に描いています。現代においても悪霊の働きは現実です。神を信じる者を、神から引き離そうとします。私も、色々な形で悪霊の働きを見せられて来たように思います。そして今、悪霊の働きに対する警戒が足りなかったと思わされています。もちろん、主イエスを信じる者は、たとえ悪霊が攻撃しようとしても、悪霊を滅ぼすことの出来る権威をお持ちの主に守られていますから、悪霊を恐れ過ぎる必要はありません。そのことは感謝なことです。(多くの人が霊の問題に訳の分からない恐怖を覚えて「霊感商法」にひっかかって、とんでもない高価なものを買わされたりするのです。私達はそういうものから自由でいられます)。しかし、それでも悪霊の働きは現実ですから、足下をすくわれないようにすることは大切です。

しかし、そのことはそのこととして押さえた上で、私はもう少し日常的なレベルの適用を考えたいのです。23～24節に「その会堂に汚れた霊につかれた人がいて、叫んで言った。『ナザレの人イエス。いったい私たちに何をしようというのです。あなたは私たちを滅ぼしに来たのでしょう。私はあなたがどなたか知っています。神の聖者です』」(23～24)とあります。この言葉は、悪霊が彼に叫ばせている言葉です。「我々」とありますから沢山の霊が叫んでいることになります。彼自身の意識もあったのかどうか分かりませんが、もしそうだとすれば、彼の意識は、ばらばらに分裂していることになります。

シスターの渡辺和子さんが「まわりの人に流されず、自分らしく生きる」という文章を書いています。そのポイントは「統一的な人生観」ということです。それを「自分の価値観をしっかり持っていること」、「人に流されないこと」と言い換えています。悪霊の影響は別としても、自分が、自我によって、感情によって、利害によって、周りの状況によって、振り回され、統一性がない、分裂していることは、私達も感じることがあるのではないでしょうか。「ここではこう言い、あそこではああ言う」という感じです。そのところに、悪霊は働きかけて来るのだと思いますが…。その分裂から少しでも身を守り、「統一的な人生観」を持って生きるために大切なことは、イエス様という物差しをしっかり持つことだと思います。何かの本で「抵抗が弱いところに侵略が起こる」という言葉を読みました。その意味で、イエス様によって抵抗を強くすることです。主に喜ばれることはどうすることなのか、

そのことをいつも思い、そこに踏み出す力を願い、また色々なものに振り回される自分を自覚し、権威者なるイエス様に絶えず頼って行く、イエス様に心を守って頂く、また試練の時は、問題に心を奪われるのではなく、イエス様の中に希望を見て行く、そのようにすることによって、私達は分裂から守られるのではないでしょうか。

しばらく前、私は、ある状況の中で非常な恐れを感じて、それこそ切羽詰まり、心がバラバラに引き裂かれ、苦しくてたまらない時がありました。心の中でもがいて、もがいて、色々なものに助けを求めましたが、最終的に恐れを追いやってくれたのは、聖書の言葉―{「神は…試練とともに脱出の道も備えてくださいます」(1 コリント 10:13)、「脱出がある」という約束}―とイエス様への祈りでした。渡辺和子さんも「『力に余る試練を与えない神』は、私の 86 年間の歩みの中に、結構たくさんの試練をくださいましたが、お約束通り、耐える力と逃れる道を、その時々に応じて備えてくださいました」(渡辺和子)と言っています。神の約束の言葉への信頼、主にすがる切なる祈り、神様は、それを用いて下さることを実感しました。主を信頼し、主に頼り、主の御心を思うこと、具体的には、御言葉と祈り、それが私達の心を、分裂から、また悪の力から守るところの主の力を頂く方法だと思います。

最後に

今日はイエス様の権威について考えました。最後に一言申し上げたいのですが…。「人生を導く 5 つの目的」という本に次のような言葉があります。「この地上でキリストに従って生きて行く時、私達は、困難、悲しみ、そして拒絶といった経験と無縁ではいられないが、これらのものは皆、この地上が私達の最終的な故郷ではないという事実を説明している。さらに…ある祈りは答えられていないように見えたり、この状況はどう考えても不当だと思ったりすることがあるかも知れないが、それらのことも、この同じ事実を示す。…私達は地上においては完全に幸せになることはない」(リック・ウォレン)。真に「イエス様の権威を認める」ということは、イエス様の権威にすがってこの世的な祝福だけを求めることではありません。滅びるしかない弱き器である私達に、甦りを与え、栄光の体を与え、永遠の御国に導くことの出来る、そのイエス様の権威を認めることです。私達は弱い存在です。時には悪の力に踊らされて簡単に足下をすくわれるのです。しかし、そんな弱い私達にも「天の御国」の約束が与えられています。だから私達は、この地上の生涯を少しでもより良く生きたいと願うし、そうすることが永遠の意味をも持つのです。主の権威に頼り、天に向かって地上の生涯を大切に生きて行きたいと願います。